

Title	開会挨拶(政令指定都市の誕生と今後の課題：自治区への可能性)
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.28, 2004.2 : 60-63
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4135
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

政令指定都市の誕生と今後の課題

——自治区への可能性——

基調講演

森 田 朗

都市提言

佐々木 信夫

パネリスト

青 木 信之

市 川 宏雄

永 井 多恵子

金 井 利之

コーディネーター

佐々木 信夫

司会 これより聖学院大学学術シンポジウム「政令指定

都市の誕生と今後の課題——自治区への可能性——」を

開催致します。まず主催者を代表して学校法人聖学院理

事長・院長、そして聖学院大学総合研究所所長の大本英

夫よりごあいさつを申し上げます。

開会挨拶

大木 英夫

聖学院大学総合研究所の所長をしております大木と申します。今日はお集まりいただきまして、まず感謝を申し上げます。このような会を推進するに当たり、今後ともお力をお添えくださいますようお願い申し上げます。

聖学院は昔の大宮と上尾のちよと間にあるところにキャンパスを持ち、十五年ほど前からこの研究所の活動が始まりましたが、その当初から世界の全体を揺り動かすような新しい世界史的な動き、グローバリゼーションと一般に言われている動き、が国家の役割に変化を与えたといいことを予見しておりました。グローバリゼーションという言葉を用いる学者もおりますけれども、一方でグローバリズムが広がっていくと同時に、ローカルコミュニティの意味が新たにでてくることを考えて、聖学

院大学としては、この埼玉において、一方でグローバルな視点を持ちながらも、なおこの地域・社会に奉仕するような大学また研究所でありたいと考えてまいりました。聖学院大学はそのような認識を持ち、大学院や研究所に都市政策研究センターを設置いたしました。また元島根県知事であられた恒松制治先生を客員教授として迎え研究活動を重ねて、春にはこのような公開の学術シンポジウムを開催、秋には自治体リーダー養成講座を開いてまいりました。この秋は一〇回目の講座となります。

とりわけ埼玉県の土屋知事は聖学院大学の志と企てに深い理解を示してくださいまして、私どもの初めからの支持者であられました。今日もここに青木信之副知事さんもパネリストとしてお見えくださいました。感謝いたします。

このシンポジウムは各方面からご後援をいただいで続けていくことができました。今年で聖学院大学公開学術シンポジウムは第六回となります。今回もすぐれた基調講演者、パネリストの方々をお迎えすることができ、このシンポジウムを開催できますことを主催者として心か

ら喜び、改めて聖学院大学と総合研究所へのご支持を感謝申し上げます。

この際、一言所感をつけ加えさせていただきますならば、今日我々の間に起こっていることは、まさに国の形の変化といえるでしょう。明治維新は英語でいうのならばリストラクション、直訳すれば王政復古ということでありませう。今日見ているのは、明治維新のときにあつた廃藩置県をもう一度、地方・藩に戻すことではあり得ないはずであり、国の形の変化は形の変化（リフォームション）という言葉——一般には「宗教改革」として用いられている言葉ですが——リフォームションというべきか、あるいはさらにリボリューション（革命）というべきか、むしろ革命的なことであるといつてよいかと思うのです。

地方自治法の成立により今日の日本は、憲法の国民民主権の論理が貫徹していくプロセスであると見ることできるのではないのでしょうか。その意味で革命、戦争のよきな武力に訴えることとはないとしましても、その動きの本質は「革命」的であります。

聖学院大学設置の当初は、佐々木先生は私どものスタッフの一人でした。このシンポジウム、また講座の計画者及び指導者として今日まで活躍しておられますが、今回出される提言の最後に「まちづくりに住民パワー」という言葉を述べられております。デモクラシーの「デモス」というのはギリシャ語で人民を意味します。クラシスはギリシャ語で「クラトス」つまり「力」です。

私は先週、学校法人聖学院が持つことができたところにある国際学校が新しいキャンパスを持つことができたので、その始業のために行つてまいりましたが、その新しいキャンパスを持つまでの努力、苦労がどれほど大きいものであるか、またその現地の住民とどういふ関係を持つてやるかをつぶさに聞いてまいりまして、さすがデモクラシーの中に住んでいる住民のパワーは強いものだということを目で見てまいりました。アトランタのすばらしい都市づくりには、実に強力な住民の知恵と力が働いていることを改めて知らされたわけです。上からの計画というよりは住民の知恵と力の表現として都市があるわけです。もちろん、日本においてこのようなこ

とが成り立つためには、市民レベル、民度の向上が必要になるはずで、デモクラシーが愚民政治になつてはならないことは、よく知られた教訓ですが、そうならないためには、このような市民的な学習の機会がなければなりません。

フランス・ベーコンは、「Scientia est potentia（知識は力である）」と申しました。さいたま市の未来をつくり出す静かな、しかし強靱な革命力は、このような学習の中から出てくるのではないかと思えます。そのようなことを望みながら、聖学院大学はそのために奉仕していく大学でありたいと願っております。私どもの言葉でサーバント・リーダーシップという言葉を用いておりますが、市民のためにサーバントシップとリーダーシップとを兼ね備えた大学でありたいと願っているわけです。

最後に、この会にお集まりいただきましたことをもう一度感謝申し上げます。この会の指導に当たられる先生方、どうぞよろしく願います。ありがとうございます（拍手）